

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380902

研究課題名(和文)成人初期における結婚生活に対するコミットメントの変容過程に関する研究

研究課題名(英文)The transformation process of marital commitment in early adulthood

研究代表者

宇都宮 博(UTSUNOMIYA, HIROSHI)

立命館大学・総合心理学部・教授

研究者番号：10320152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：成人初期の婚約者ならびに配偶者のいる者を対象にインターネット調査ならびにインタビュー調査を行い、結婚生活の形成期におけるコミットメントの推移とその関連要因について検討した。

分析の結果、婚約期と新婚期でのコミットメントにおいて性差が確認されるとともに、新婚期のコミットメントが婚約期での状態によってある程度予測できること、さらにはコミットメントの性質によって心理的適応が異なる影響を受けていることなどが示された。本研究の知見は、将来結婚を計画している恋愛カップルや育児希望により不妊治療に取り組む夫婦への心理臨床的支援において、男女双方のコミットメントを考慮する必要性を示唆するものであった。

研究成果の概要(英文)：This study examined changes in marital commitment during the formative period of married life. The results indicated gender differences and differences in commitment between the period of engagement and newly-married life. Moreover, commitment in the newly-married period was predicted to some extent by commitment in the engagement period. Furthermore, it was indicated that psychological adaptation was affected by the quality of commitment. These findings suggest the necessity to consider gender differences in the quality of commitment when providing clinical or psychological support for couples planning to wed in the future and for marital couples that are receiving fertility treatment for bearing children.

研究分野：発達心理学

キーワード：成人初期 夫婦 婚約 関係性 コミットメント 心理的適応

1. 研究開始当初の背景

我が国の平均初婚年齢は男女ともに年々上昇しており、2010年では男性が30.5歳、女性が28.8歳となっている(国立社会保障・人口問題研究所, 2011)。また、各年齢層での未婚者の割合も高まっており、2005年の国勢調査(総務省統計局)によると、男性では30代前半(30~34歳)の47.1%、同後半(35~39歳)の30.0%、女性では同前半の32.0%、同後半の18.4%にまで増加しており、未婚化も進展しているといえる。しかしながら、その反面、依然として結婚する意思をもつ者が多数(男性:86.3%、女性:89.4%)を占めており(国立社会保障・人口問題研究所, 2011)、結婚したいと考える独身者が多いにもかかわらず、晩婚化や未婚化が進展する背景が注目されている。

その一方で、離婚状況(厚生労働省, 2010)をみると2009年では253,353件となっている。離婚した夫婦の結婚年数に着目したデータによると、いわゆる熟年離婚が増えているものの、結婚生活の形成期ともいえる同居期間が「5年未満」の夫婦が今なお最も多くを占め、この30年間では全体の30~40%を推移している。こうした現状から、結婚を機に獲得される「配偶者役割への適応」とそれを規定する要因の解明が必要とされている。しかしながら、結婚前後あるいは新婚期のパートナーとの関係性をめぐる問題については実証的知見が乏しく、我が国の研究者が論文に引用する情報の多くが欧米の研究結果に依存する形となっている。

研究の一つの流れとして、コミットメントに着目した取り組みがみられる。コミットメントは、恋愛や夫婦といった親密な他者との関係性の質として、とくに持続性や適応性の面からコミットメントの概念の有効性が示されており、実証研究において重要な役割を果たしてきた。しかしながら、その連結点ともいえる婚約期や、子どものいない若年夫婦に関する知見は乏しく、その必要性が指摘されてきた。そこで、本研究では、結婚を間近に控えた、あるいは結婚後間もない成人初期の人々を対象に、彼らのコミットメントをめぐる問題に着目することとした。

結婚生活に対するコミットメントは、結婚生活を継続させる中枢的機能であること(Bradbury, 1995)や、夫妻間の望ましいコミュニケーションや、幸福感の高さ、困難時での建設的な対応と関連していること(Stanley, 2005)、関係の持続や改善を左右する鍵を握っていること(Johnson, 1999)などが指摘されている。

近年ではコミットメントを多次元的にとらえる動きが顕著である。例えば、宇都宮(2005)では、配偶者との関係性を問題とする「人格的コミットメント」、結婚生活の継続に伴い付随して生じる利益にかかわる「機能的コミットメント」、消極的な継続を意味する「非自発的コミットメント」という3つ

のコミットメントの性質を見出している。結婚生活の継続は自発的なコミットメントを基盤としていながらも、その対象が必ずしも配偶者(との関係性)に向いているとは限らず、有配偶者であることの社会的有利性や「持続性の観念」から結婚生活の継続を望む場合もあると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、主として婚約段階ならびに結婚年数の浅い成人初期の人々を対象に、結婚生活の継続の質を左右する中核的要因とされるコミットメントの変容過程と精神的健康との関連などについて、実証的に検討することであった。インターネット調査による縦断研究を中心としつつ、補完的にインタビュー調査による質的研究も行った。

3. 研究の方法

(1)文献資料ならびに予備調査を通して、婚約期のカップルおよび夫婦に適用可能な尺度の項目について検討を行った。

(2)インターネット調査によって、尺度の構成と信頼性、妥当性の検証を行うとともに、3度の調査による年次推移の分析を行った。さらにコミットメントと精神的健康との関連についても検討した。

(3)インタビュー調査を通して、コミットメントの形成とその展開に関連する要因間のメカニズムについて検討を行った。

本研究の対象者は、基本的に調査の実施(開始)時点で、自己および婚約者がともに20代もしくは30代に位置し、結婚歴がなく、入籍(ないしは挙式)を1年以内に控えている男女、ないしは同じ年代で結婚後5年以内に位置する新婚期の有配偶者(すべて初婚)であった。

4. 研究成果

本研究の主な成果としては、まず婚約期ならびに結婚生活でのコミットメントを測定するための尺度として、Inventory of Premarital Commitment(IPC)とInventory of Marital Commitment(IMC)が作成された点が挙げられる。前者については、巻末資料を参照されたい。

すなわち、「関係的コミットメント」、「合理的コミットメント」、「拘束的コミットメント」、そして「コミットメントの無自覚・欠如」の度合いを測定するものである。「関係的コミットメント」、「合理的コミットメント」、「拘束的コミットメント」はコミットメントの方向性の3つの柱であるが、これらは夫婦を対象としたAdams & Jones(1997)、Johnson et al.(1999)、伊藤・相良(2015)と概ね符合する構造であった。また、コミットメントの方向性をとらえる「関係的コミットメント」は【人格的非代替性】と【情緒的充足】、「合理的コミットメント」は【価値・信念】と【実利・生活】、「拘束的コミットメ

ント」は【社会的支障】と【別離困難】とそれぞれ2つの下位尺度によって構成されることも示された。本研究での知見は、開発された尺度の信頼性および妥当性を示すものであった。

また、3期にわたり収集されたデータから、コミットメントにおける婚約期と新婚期との間、ならびに男女間での差異が確認されるとともに、新婚期のコミットメントが婚約期でのその状態によってある程度予測できること、さらにはコミットメントの性質によって各時点での心理的適応が影響を受けていることなどが示された。

一方のインタビュー調査では、対象者の語りが時系列に沿って、第1期の「出会い」から「婚約まで」、第2期の「婚約」から「結婚」まで、第3期の「結婚」から「現在」まで、そして「これからの人生」ごとに整理され、エピソードとそれに対する意味づけや、コミットメント形成の道筋が記述された。本分析を通して、当事者間の共通性と差異性をふまえながら、若年成人における新婚期の関係性発達とその関連要因について考察された。

本研究を通して、婚約期から新婚期にかけてのコミットメントの展開過程や心理的適応との関連に関する新たな知見が得られたことから、一定の学術的な意義が認められると考えられる。また、本研究の知見は、将来結婚を計画している恋愛カップルや挙児希望により不妊治療に取り組む夫婦への心理臨床的支援のための基礎資料として、社会的にも有用であると考えられた。

コミットメント研究は欧米において比較的多く取り組まれているものの、コミットメントが生涯にわたり変容する道筋、いわば「可変性」に着目した実証研究は十分に行われていない。しかし、コミットメントが関係対象とのコミュニケーションによって生成され(Sahlstein, & Baxter, 2001)、またその各次元の相対的な優位性が状況によって異なること(Adams, & Spain, 1999)をふまえるならば、コミットメントは生涯を通して変容し続けるダイナミックな性質であるといえる。

今後は、婚約期からさらに遡った時期からの研究や新婚期以降の追跡研究が期待される。さらに、成人期におけるパートナーシップの多様化をふまえ、婚姻制度にもとづかない関係性でのコミットメントの様相や適応性との比較も視野に入れた研究の展開が必要であると考えられる。

【資料】プレマリタル・コミットメント・インベントリー (Utsumiya, 2016)

【指示文】あなたが結婚する理由についてお尋ねします。現在のお気持ちとして、それぞれもっとも当てはまるものを1つ選んでください。

【選択肢】まったくあてはまらない (1点)
あまりあてはまらない (2点)
どちらでもない (3点)
ややあてはまる (4点)
かなりあてはまる (5点)

1. 関係的コミットメント

(1) 人格的非代替性

- ・彼(彼女)を本当に愛しているから
- ・彼(彼女)を最高の伴侶だと思っているから
- ・彼(彼女)をあるがまま受け入れられるから
- ・彼(彼女)は、かけがえのない唯一無二の存在だから

(2) 情緒的充足

- ・彼(彼女)と一緒にいても、窮屈に感じない
- ・彼(彼女)と一緒にいると、楽しい
- ・彼(彼女)と一緒にいると、安心である
- ・彼(彼女)と一緒にいると、落ち着く

2. 合理的コミットメント

(1) 価値・信念

- ・結婚すると約束したのなら、きちんとやり遂げるべきだ
- ・例え困難な状況になっても、約束したことはきちんとやるべきだ
- ・結婚することに同意したのであれば、道徳上結婚をすべきである
- ・結婚は使命であり、きちんと責任を果たすべきである

(2) 実利・生活

- ・彼(彼女)がいると、何かと役に立つ
- ・生活の安定のために、彼(彼女)が必要である
- ・年齢的な事情
- ・性的なパートナーとして必要である

3. 拘束的コミットメント

(1) 社会的支障

- ・もし婚約を解消しようとすれば、自分の家族から強く反対されるだろう
- ・婚約を解消したら、知人や友人に食わせる顔がない
- ・婚約を解消したら、自分のコミュニティ(例えば、職場や趣味活動の場など)の中で立場がない
- ・もし婚約を解消しようとすれば、彼(彼女)の家族から強く反対されるだろう

(2) 別離困難

- ・たとえ婚約を解消しようとしても、彼(彼女)が承諾してくれないだろう
- ・結婚に関する主導権は、私にはない
- ・これが自分の運命だと思い、あきらめている
- ・もし婚約を解消することになったら、彼(彼女)は自分を許してくれないだろう

4. コミットメントの無自覚・欠陥

- ・一緒にいることが当然すぎて、今さら結婚する理由など思い浮かばない
- ・とくに別れる理由がない
- ・結婚する理由なんて考えても仕方ないこと
- ・結婚する理由を聞かれても、じっくり考えたことがないので返答に困る

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

宇都宮博 (2015). 新婚期における配偶者との関係性と心理的適応 - コミットメント志向性の枠組みから -. 立命館人間科学研究 31, 53-63. (査読無)

宇都宮博 (2014). 高齢者の結婚生活の質と心理的適応および余暇活動 - 関係性ステータスの観点から -. 高齢者のケアと行動科学, 19, 45-62. (査読有)

春日秀朗・宇都宮博・サトウタツヤ (2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響 - 期待に対する反応様式に注目して -. 発達心理学研究, 25, 121-132. (査読有)

春日秀朗・宇都宮博・サトウタツヤ (2013). 親の期待に対する反応様式の発達的变化 - 大学生の回想データから -. 立命館人間科学研究, 28, 127-136. (査読有)

〔学会発表〕(計6件)

宇都宮博 (2018). 生涯発達の視座からみた青年期 - 親密な他者との関係性に着目して - (シンポジウム・話題提供). 日本発達心理学会第29回大会, 東北大学(宮城県), 2018/03/25

宇都宮博 (2017). 恋愛から結婚への進展

をめぐる心理学的研究の課題 (ワークショップ・企画責任・話題提供). 日本家族心理学会 第 34 回大会, 作新学院大学・栃木県総合文化センター(栃木県), 2017/09/03

宇都宮博 (2017). 婚約期の心理を通してみた結婚の今日的意味 - コミットメントの視点から - (ラウンドテーブル・企画責任・話題提供). 日本発達心理学会第 28 回大会, 広島国際会議場・アステールプラザ・広島市文化交流会館(広島県), 2017/03/25

Utsunomiya, H. (2016). Development of the Inventory of Premarital Commitment (IPC): Factor structure, reliability, and validity. 31st International Congress of Psychology, Yokohama(Japan), 2016/07/26

宇都宮博 (2014). 成人子からみた老親の結婚生活の質と心理的距離 - 両親間葛藤との関連から -. 日本家族心理学会 第 31 回大会, 京都教育大学(京都府), 2014/07/20

Utsunomiya, H. (2013). Individual differences in evaluation of married life among middle-aged couples. 16th biennial meeting of the International Society for the Study of Individual Differences, Barcelona(Spain), 2013/07/24

[図書](計 7 件)

宇都宮博 (2017). 両親がケンカばかりしています. 大野久ほか(編) 君の悩みに答えよう - 青年心理学者と考える 10 代・20 代のための生きるヒント -. 福村出版, 176p (pp.118-119.)

宇都宮博・神谷哲司(編) (2016). 夫と妻の生涯発達心理学 - 関係性の危機と成熟 -. 福村出版, 312p.

宇都宮博 (2014). 高齢期夫婦の関係性. 柏木恵子・平木典子(編) 日本の夫婦 - パートナーとやっていく幸せと葛藤 -. 金子書房, 208p(pp.59-78.)

宇都宮博 (2014). 人間関係 - 家族・友人・恋人を中心として -. サトウタツヤ・北岡明佳・土田宣明(編) 心理学スタンダード - 学問する楽しさを知る -. ミネルヴァ書房, 288p (pp.95-109.)

宇都宮博 (2014). 親の離婚経験. 子安 増生・二宮克美(監訳) 青年期発達百科事典. 丸善出版, 1568p(第 2 巻 pp.58-67.)

宇都宮博 (2014). 家族関係. 後藤宗理ほか(編) 新・青年心理学ハンドブック. 福村出

版, 726p(pp.339-351.)

宇都宮博 (2013). 配偶者選択と結婚生活への移行, 生涯にわたる配偶者との関係性の危機と発達, 老年期の家族・社会関係, ライフサイクルと家族のケア役割をめぐらる問題. 岡本祐子・深瀬裕子(編) エピソードでつかむ生涯発達心理学. ミネルヴァ書房, 256p(pp.136-139., pp.162-165., pp.188-191., pp.218-221.)

6. 研究組織

(1)研究代表者

宇都宮 博 (UTSUNOMIYA, Hiroshi)
立命館大学・総合心理学部・教授
研究者番号: 10320152